

大学生の入学期における不登校傾向と 心理社会的要因との関連

堀 匡*

問題と目的

大学入学は学生にとって大きな環境の変化である。鶴田(2001)は, 大学生活の4年間を「学生生活サイクル」として3つの時期に分類しており, 入学後初めの1年間を「入学期」としている。入学期には, これまでに慣れ親しんだ生活から新しい学生生活に移行し, 学業, 進路, 対人関係すべての領域において, 新しい環境に適応していかなければならない。それゆえ, 入学期においては, 学生は大きなストレスを抱えることになるが, 新しい生活に適応できない場合には, 過去になじんだ習慣や友人関係への逃避が生じやすいとされる(鶴田, 2010)。このような過去への逃避は, 新しい環境への参入を妨げ, 授業の欠席や大学での対人関係における孤立などの形で表れやすいと考えられる。

環境移行期にある学生の適応を支援するために, 多くの大学で様々な取り組みが行われている。その中で代表的なものは, 大学の学生相談室や保健管理部門が実施している入学時スクリーニング調査であり, 調査結果から不適応リスクの高い学生を抽出し, 呼び出し面接等を行う取り組みである(早坂, 2010)。そして, 必要があれば, その後の継続的なフォローにもつなげることができ, 早期の退学防止などに効果的な支援となっている。

学生相談の現場において, 現在スクリーニングツールとして最も利用されているものがUPI (University Personality Inventory) である(早坂, 2010)。UPI は, 1966年に全国大学保健管理協会によって作成された, 60項目からなる大学生対象の精神的健康度に関する調査である。長年のデータ蓄積があることや, 著作権フリーのため比較的自由に研究を進められるなどの利点からこれまで幅広く用いられてきた(酒井・野口, 2015)。UPI は, 一部健康保持状態や悩みごとに関する項目も含まれてはいるが, 基本的には, 精神的・身体的自覚症状(「食欲がない」, 「何となく不安である」, 「他人の視線が気になる」など)を問う項目で構成されており, 入学以前の状態について確認するものである。このようなスクリーニングに基づく支援は, 一定以上の症状を既に呈している学生, つまり精神的不健康のリスクの

*人文学部講師—臨床心理学, 健康心理学

高い学生を抽出するという点で、予防的取り組みとしては二次予防的な意味合いを持つものであると言える。しかしながら、大学不適應は、入学前に何らかの精神的・身体的症状を呈していなくとも、入学後のストレス等の様々な体験によっても生じてくる可能性がある。

なお、心身の健康問題に関する予防の概念は、一次予防、二次予防、三次予防の3種類に分類される。一次予防とは、まだ疾患を発症していない人々に対して疾患の発症自体を減少させる活動であり、二次予防とは、疾患の早期発見、早期治療に関わるもの、三次予防とは、疾患の再発リスクや疾患から生じる困難を減少させるものである（坂本・及川・伊藤・西河，2010）。

本研究では、大学不適應状態の中でも最もよく見られる不登校に焦点を当てる。大学生の不登校とは、授業に出られない、もしくは大学そのものに通えない状態を指し、単位不足による留年や休退学の問題のみならず、その後の社会的ひきこもりにも発展しうる。大学生の不登校は、学生生活サイクルのどの時点でも生じてくる可能性のある問題である。実際に、不登校状態を示す学生の数について、水田・石谷・安住（2011）によると、全国の大学生約280万人中2.0～8.1万人程度であり、出現率は全学生数の0.7～2.9%であると推定されている。従来から、スチューデント・アパシー（笠原，2006）などの大学に通えない学生の存在や現象について注目はされていたが、近年では、不登校に関連した問題が増加傾向にあるとの指摘がしばしばなされている（水田他，2011）。また、近年の大学生の不登校の原因には様々なものがあり、スチューデント・アパシーに限られる現象ではない。

不登校学生に対する支援は、教員や学生相談機関のカウンセラー、教務部（課）の職員など学内のスタッフを中心に行われるが、日本学生支援機構（2017）の調査によると、大学の取り組みで最も多く実施されているのは、「担任もしくはゼミ・研究室の教員により面談している（77.6%，大学754校を対象）」であった。しかしながら、担任やゼミの指導教員は必ずしも専門的な知識やスキルを持ち合わせているわけではなく、実際には対応に苦慮するケースも数多くあるのが現状である。また、不登校学生の中には、一定の割合でひきこもり状態に陥っている学生がいることが指摘されており（水田他，2011）、不登校が一旦生じると、学生にアクセスすること自体が困難となる場合がある。したがって、不登校学生の支援においては、発生後の早期対応のみならず、発生前の予防的対応も重要であると言える。

大学生の不登校について、堀井（2013）は、問題の悪化を未然に防ぐという予防的観点から、「不登校傾向」への対応の重要性を指摘し、不登校傾向を測定する尺度を作成している。この尺度は、不登校傾向を、学校へ行くことへの忌避的感情である「登校回避感情」と実際に授業を時々欠席するなどの行動面における「登校回避行動」の2側面から捉えている点が特徴的である。このような尺度は、精神的・身体的症状よりも、登校に対する個人の感情や行動というより日常的な水準で不登校の兆候を捉えるという点で、一次予防としての取り組みに有用である。堀井（2013）は、大学生の不登校傾向について、未だ実証的な研究が少なく、その実態やアセスメント、要因、形成メカニズム等に関して今後明らかにしていく必要性を

指摘している。その上で、大学生全般を対象に、自己否定感や自己意識のような個人内要因、自己同一性、パーソナリティ要因、学業的困難さ、大学適応感、心身不調などの諸要因との関連について一連の研究において検討している（堀井，2015；堀井，2016）。

本研究では、冒頭で述べたように、大学生の初期適応について注目しているため、大学新入生を対象に、不登校傾向と心理社会的要因との関連について検討していく。なお、一次予防的な観点から、大学入学後の日常的なレベルのストレス経験に焦点を当て、不登校傾向との関連について明らかにすることを目的とする。また、これまで注目されてきた大学入学最初期の適応だけでなく、入学期全般を通して見ていく。具体的には、入学期前半として前期開始後約3か月経過時点と入学期後半として後期開始後約3か月経過時点での、ストレスと不登校傾向との関連についてそれぞれ検討する。同じ入学期内であっても前半と後半では、不登校傾向と関連する要因は異なってくることが予想される。さらに、学内の人的資源である学内友人サポートや大学生活に対する満足感も検討すべき要因として加える。従来の研究から、友人サポートの多さは、大学生の学校適応感（永井，2016）と正の関連を、男子学生の無気力感（下坂，2001）と負の関連を有することが示されており、新入生の不登校傾向に対しても抑制的な影響を持つと予想される。また、鶴田（2010）によると、入学期の学生の大学への適応は、入学した大学や学部の満足感によって大きく左右される。このことから、大学新入生の大学生活に対する満足度は、ストレスや友人サポートと不登校傾向との関連を媒介しうる要因であると考えられる。

以上のことから、研究1では、入学期前半（前期開始後約3か月経過時点）における、大学生の不登校傾向と大学生活でのストレス、学内友人サポート及び大学生活満足度との関連について検討する。また、研究2では、入学期後半（後期開始後約3か月経過時点）における大学生の不登校傾向と大学生活でのストレス、学内友人サポート及び大学生活満足度との関連について検討する。さらに、各研究において、居住形態やアルバイト従事、部活動・サークル活動への参加の有無などの個人属性による不登校傾向の違いについても併せて検討する。

入学期前半と後半それぞれにおける不登校傾向と心理社会的要因との関連について明らかにすることは、新入生の各時期における不登校の兆候を捉えるために、一般教員が普段から学生のどのような点について注意すべきなのかということについて、有益な情報を与えうる。

研究1

入学後約3か月経過時点における、大学新入生の不登校傾向と大学生活でのストレス、学内友人サポート、大学生活満足度、個人属性との関連について検討する。

方法

調査対象者

A 大学（4 年制総合大学）において、著者が分担担当した教養科目の受講生 141 名を対象に質問紙調査を行った。調査は、2013 年 6 月下旬に実施した。回答に不備のあったもの、2 年生以上のものを除外した 124 名（男性 81 名、女性 43 名）を分析対象とした（平均年齢＝18.39 歳、 $SD = 0.74$ ）。

調査項目

入学期前半のストレス体験 嶋（1999）の大学生用日常生活ストレス尺度の短縮版を使用した（23 項目）。本尺度は、最近 3 か月間（大学入学以降）において、日常生活上の様々なストレスに対し、それぞれ「経験しない・感じない（0 点）」～「とても気になった（4 点）」の 5 件法で評定するものである。本尺度には、「自己に関するストレス（項目例 現実の自分の姿と理想とのギャップ など）」、「対人関係に関するストレス（項目例 他人から失望させられたこと など）」、「学業に関するストレス（項目例 授業についていくのが大変なこと など）」、「身体に関するストレス（項目例 体の調子が思わしくないこと など）」の 4 下位尺度が設けられている。それぞれ、得点が高い方が、そのストレスをより強く体験したことを示す。

ソーシャルサポート 福岡（1997）のソーシャルサポート測定尺度を使用した（9 項目）。サポート源として、学内の友人を設定した。友人との関係において知覚されるサポートに関する各項目（項目例 あなたが落ち込んでいるとき、元気づけてくれる など）に対し、「全くあてはまらない（1 点）」～「非常によくあてはまる（5 点）」の 5 件法で評定させた。得点が高い方が、より多くのサポートを知覚していることを示す。

大学生生活満足度 「あなたは現在大学生活にどの程度満足していますか」という 1 項目を作成し、「全く満足していない（1 点）」～「非常に満足している（5 点）」の 5 件法で評定させた。

不登校傾向 堀井（2013）の大学生不登校傾向尺度を使用した（12 項目）。本尺度は、「登校回避感情（項目例 朝、今日は大学に行きたくないと思うことがある など）」、「登校回避行動（項目例 なんとなく大学に行かないことがある など）」の 2 下位尺度から構成され、各項目に対し、「全然あてはまらない（0 点）」～「非常にあてはまる（6 点）」の 7 件法で評定するものである。

個人属性 性別、居住形態（自宅、下宿）、部活動参加の有無、アルバイト従事の有無についてたずねた。

調査手続き

調査は、講義終了後に、教室内で質問紙を配布し、その場で回答を求め回収した。なお、本調査実施に先立ち、1) 本調査の目的、2) 本調査への協力は任意であり、協力しないことで不利益を生じることは一切ないこと、3) 本調査は無記名で実施し、結果は統計的に処理されるため、個人の回答が特定されることはないこと、4) 本調査で得られたデータは研究のためだけに使用し、個人に迷惑をかけることは一切ないことの4点について説明し、調査への協力を同意した場合にのみ回答するように依頼した。

結果

研究1、2ともに、データの分析には、IBM SPSS Statistics 21 及び Amos ver. 21 を用いた。

基本統計量

各変数の得点範囲、平均値、標準偏差、Cronbach の α 信頼性係数を算出し、Table1 に示した。 α 信頼性係数は、全て .71 以上であり、内的一貫性は高いことが示された。また、各変数間の相関係数を算出し、Table 2 に示した。

Table 1
基本統計量

変数名	得点範囲	平均値	SD	α 係数
ストレスサー				
自己	0.00-24.00	9.61	5.44	.86
対人関係	0.00-32.00	6.86	5.31	.87
学業	0.00-20.00	9.61	4.04	.75
身体	0.00-16.00	4.46	2.89	.71
学内友人サポート	9.00-45.00	31.98	8.64	.97
大学生生活満足度	1.00-5.00	3.81	0.78	
不登校傾向				
登校回避感情	0.00-36.00	16.12	7.98	.81
登校回避行動	0.00-36.00	5.52	6.81	.85

Table 2
各変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 自己	1.00	.54***	.54***	.33***	-.17	-.13	.32***	.15
2. 対人関係		1.00	.39***	.44***	-.20*	-.08	.11	.17
3. 学業			1.00	.37***	-.04	-.05	.16	.11
4. 身体				1.00	-.06	-.04	.15	.10
5. 友人サポート					1.00	.38***	-.14	.03
6. 満足度						1.00	-.27**	.08
7. 回避感情							1.00	.27**
8. 回避行動								1.00

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

個人属性による不登校傾向の違い

個人属性の違いにより不登校傾向に差があるかどうかを検討するために、属性別（性別、居住形態、部活動参加の有無、アルバイト従事の有無）に t 検定を行った。分析の結果、居住形態の違いにおいてのみ登校回避感情 ($t(119) = -3.76, p < .001$), 登校回避行動 ($t(49.42) = -3.84, p < .001$) のいずれにも有意差が見られ、自宅生よりも下宿生の方が得点が高かった (Table 3)。なお、群間に等分散性が仮定されない場合は、Welch の修正を行った。

Table 3
居住形態別不登校傾向の比較

変数名	自宅 ($n = 24$)		下宿 ($n = 97$)		t
	平均値	SD	平均値	SD	
登校回避感情	10.92	6.94	17.41	7.72	-3.76***
登校回避行動	1.79	4.83	6.44	6.94	-3.84***

*** $p < .001$

不登校傾向と入学期前半のストレッサー、学内友人サポート及び大学生生活満足度との関連

不登校傾向と入学期前半のストレッサー、学内友人サポート及び大学生生活満足度との関連を検討するために、共分散構造分析に基づくパス解析を行った。各変数間の関連には2種類の経路を想定した。第一は、各ストレッサーと学内友人サポートが、登校回避感情及び登校回避行動と直接関連を持つ経路である。第二は、各ストレッサーと学内友人サポートが、大学生生活満足度を介して、登校回避感情、登校回避行動と間接的に関連を持つ経路である。さらに、堀井（2016）に基づき、登校回避感情が登校回避行動に先行することを想定してパス

を引いた。各ストレスター間には、共分散のパスを仮定した。また、居住形態をダミー変数として（自宅＝1，下宿＝0）登校回避感情，登校回避行動それぞれへのパスを引いた。最終的に、統計的に有意なパスのみを残した（Figure 1）。モデルの適合度は、 $\chi^2(24) = 20.441$ ($p = 0.671$)， $GFI = .965$ ， $AGFI = .935$ ， $RMSEA = .000$ であり，データとモデルとの適合は良好であると言える。

分析の結果，登校回避行動に対しては，登校回避感情のみが有意な正の関連を有し（ $\beta = .20$ ， $p < .05$ ），他の変数からのパスは有意ではなかった。また，登校回避感情に対しては，自己に関するストレスターが直接有意な正の関連を有した（ $\beta = .25$ ， $p < .01$ ）。学内友人サポートは，大学生生活満足度と有意な正の関連を有し（ $\beta = .38$ ， $p < .01$ ），大学生生活満足度は，登校回避感情と有意な負の関連を有した（ $\beta = -.24$ ， $p < .01$ ）。また，居住形態は，登校回避感情（ $\beta = -.29$ ， $p < .001$ ），登校回避行動（ $\beta = -.21$ ， $p < .05$ ）それぞれと直接有意な負の関連を有した。

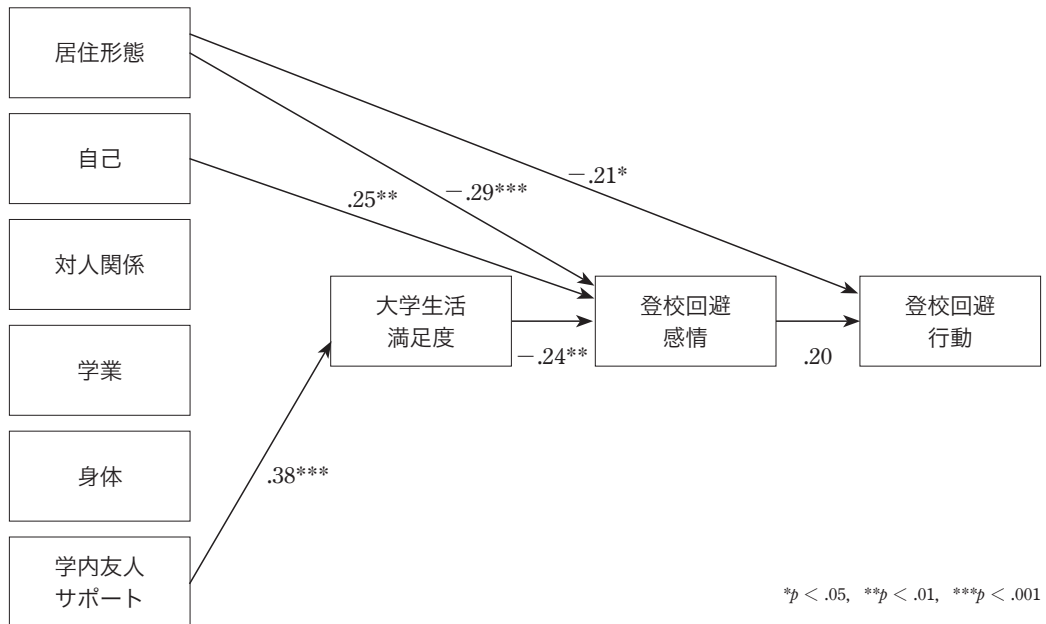


Figure 1. 入学期前半における不登校傾向と心理社会的要因との関連

注) 図が煩雑になるのを避けるため，誤差変数及び各ストレスター間に仮定した共分散のパスは省略した。

考察

研究1では，入学期前半の不登校傾向と大学生活でのストレスター，学内友人サポート，大学生生活満足度，個人属性との関連について検討した。

分析の結果，まず個人属性に関しては，居住形態の違いにおいて t 検定で有意な差が見ら

れ、登校回避感情、登校回避行動のいずれも、下宿生の方が自宅生よりも高いことが示された。さらに、パス解析の結果から、居住形態は、登校回避感情と登校回避行動と直接負の関連を有した。以上のことから、入学期前半における下宿生活は、大学新入生の不登校傾向を促す要因となりうることが示唆された。大学入学を期に、実家を離れて下宿生活を始める学生は一定数存在し、その大半は一人暮らしを開始する。中には、きょうだいと同居したり、学生寮のように他の学生と共同生活をしたりする学生もいるが、いずれにせよ、自宅生以上にこれまでの生活環境からの大きな変化を体験しており、それらは心理的にも大きな負担となっていると考えられる。

また、一人暮らしの場合には、生活を自律的に管理することの難しさから、生活習慣の問題が生じ、大学へ行くことの回避感情や欠席の傾向を高めている可能性がある。大学生の居住形態別に生活習慣を比較した研究においては、自宅生に比べて一人暮らしの学生は、就寝時刻や起床時刻がより後退する傾向が見られており（内田・木本・塚本・神林・武田，2015）、食事面においても朝食及び全般的な欠食数が多く（内田他，2015）、基礎食品群における栄養取得量が低いこと（笠巻・宮西・笠原・松本・西田・渋谷，2018）が示されている。これらのことから、家族と同居していない場合は生活リズムが乱れやすく、一人暮らしを開始したばかりの入学期前期の学生においては、より顕著にその傾向が見られたため、下宿生は登校することへの否定的感情や欠席する傾向が高くなったと考えられる。

次に、ストレスサーに関して、自己に関するストレスサーが直接登校回避感情と正の関連を持ち、登校回避感情を介して、不登校行動と正の関連を有していた。自己に関するストレスサーには、自分の性格や外見に関する悩み（項目例 自分の容姿や外見に対する不満）や、目標喪失（項目例 自分が何をすべきか分からないこと）、現状への不満（項目例 現実の自分の姿と理想とのギャップ）、将来の不安（項目例 自分の将来への不安）など自身の容姿や生き方に関わるような悩みである。このような悩みの程度が強い場合には、他者との比較において劣等感を抱きやすく、新しい環境に入っていく際には特に抵抗感が高まるため、登校回避感情と直接正の関連を持ったと考えられる。

また、入学期に生じやすい問題として、不本意入学者の適応上の問題が挙げられる。第一志望の大学に合格できずにやむをえず別の大学に入学した学生は、自己に関するストレスサーの項目にあるような、理想と現実とのギャップや目標喪失、将来への不安などを入学直後から強く感じていると考えられる。吉良（2001）によると、このような学生が、心理的な意味で大学生になるためには、自分自身の学力や志望に合わせて大学・学部を選択し、受験生としての心理的課題に区切りをつける必要がある。そして、その過程で、自分のプライドや自己像、将来の志望や願望と向き合い、その一部を断念したり、現実合うように修正したりすることに直面する。しかしながら、自分と向き合う作業にはある程度の時間を要し、いつまでも現実を受け止められない場合には、何度も再受験を繰り返すようなケースも存在する。不本意入学者にとって、入学期前半はまさにこのような受け入れられない現実直面

させられて迷い・葛藤する時期であり、それゆえ現在の大学に通うことに対してモチベーションが低下しやすい状態にあると考えられる。以上のことから、この時期において、自己に関するストレスは登校回避感情と正の関連を持ったと推察される。

学内友人サポートは大学生生活満足度と正の関連を有し、間接的に登校回避感情と負の関連を有した。新しい環境に入ったときにいかに友人関係を築いていけるかは非常に大きな課題であり（吉良，2001），新入生にとって，学内の人間関係の充実度は新しい環境をポジティブに評価することにつながりうる。先述のように，入学期の学生生活の適応や大学への所属感，入学した大学・学部の満足感によって大きく左右される（鶴田，2010）ことから，大学内でソーシャルサポートが期待できるような良好な友人関係を築けているほど，所属する大学での生活に対するポジティブな評価が高まると考えられ，そのことは，大学に対するネガティブな感情である登校回避感情と負の関連を持つ方向に作用すると推察される。

研究 2

後期開始後約 3 か月経過時点における，大学新入生の不登校傾向と大学生活でのストレス，学内友人サポート，大学生生活満足度，個人属性との関連について検討する。

方法

調査対象者

B 大学（4 年制総合大学）において，著者が担当した 1 年生向けの心理学系専門科目の受講生 102 名を対象に質問紙調査を行った。調査は，2017 年 12 月中旬に実施した。回答に不備のあったもの，2 年生以上のものを除外した 74 名（男性 34 名，女性 40 名）を分析対象とした（平均年齢 = 18.80 歳， $SD = 0.52$ ）。

調査項目

入学期後半のストレス体験 研究 1 と同様の尺度を用いた。ストレスの経験をたずねる期間は，最近 3 か月間（後期開始以降）とした。

ソーシャルサポート 研究 1 と同様の尺度を用いた。

大学生生活満足度 研究 1 と同様に「あなたは現在大学生活にどの程度満足していますか」という 1 項目を作成し，「全く満足していない（1 点）」～「非常に満足している（5 点）」の

5 件法で評定させた。

不登校傾向 研究 1 と同様の尺度を用いた。

個人属性 性別，居住形態（自宅，下宿），部活動参加の有無，アルバイト従事の有無についてたずねた。

なお，この調査では，毎日の平均的な通学時間と一般健康状態も併せて測定したが，研究 1 と扱う要因を同一にして比較検討するため，研究 2 では分析には用いない。

調査手続き

調査は，講義終了後に，教室内で質問紙を配布し，その場で回答を求め回収した。なお，本調査実施に先立ち，1) 本調査の目的，2) 本調査への協力は任意であり，協力しないことで不利益を生じることは一切ないこと，3) 本調査は無記名で実施し，結果は統計的に処理されるため，個人の回答が特定されることはないこと，4) 本調査で得られたデータは研究のためだけに使用し，個人に迷惑をかけることは一切ないことの 4 点について説明し，調査への協力を同意した場合にのみ回答するように依頼した。

結果

基本統計量

各変数の得点範囲，平均値，標準偏差，Cronbach の α 信頼性係数を算出し，Table 4 に示した。 α 信頼性係数は，全て .74 以上であり，内的一貫性は高いことが示された。また，各変数間

Table 4
基本統計量

変数名	得点範囲	平均値	SD	α 係数
ストレッサー				
自己	0.00-24.00	11.23	5.39	.82
対人関係	0.00-32.00	10.96	7.80	.88
学業	0.00-20.00	9.39	4.51	.82
身体	0.00-16.00	5.80	3.55	.74
学内友人サポート	9.00-45.00	30.49	8.51	.94
大学生生活満足度	1.00-5.00	3.36	0.93	
不登校傾向				
登校回避感情	0.00-36.00	23.34	8.03	.83
登校回避行動	0.00-36.00	8.66	8.93	.91

Table 5
各変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 自己	1.00	.75***	.62***	.36**	.05	-.02	.28*	.20
2. 対人関係		1.00	.60***	.52***	-.03	-.09	.32**	.14
3. 学業			1.00	.62***	.01	-.23	.47***	.21
4. 身体				1.00	-.02	-.38**	.39**	.26*
5. 友人サポート					1.00	.39**	-.13	-.08
6. 満足度						1.00	-.44***	-.17
7. 回避感情							1.00	.36**
8. 回避行動								1.007

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

の相関係数を算出し、Table 5 に示した。

個人属性による不登校傾向の違い

個人属性の違いにより不登校傾向に差があるかどうかを検討するために、属性別（性別、居住形態、部活動参加の有無、アルバイト従事の有無）に t 検定を行った。分析結果の結果、いずれの属性についても有意な差は見られなかった。

不登校傾向と入学期後半のストレス、学内友人サポート及び大学生生活満足度との関連

不登校傾向と入学期後半のストレス、学内友人サポート及び大学生生活満足度との関連を検討するために、共分散構造分析に基づくパス解析を行った。研究 1 と同様のモデルを想定し、各変数間の関連には 2 種類の経路を想定した。各ストレス間には、共分散のパスを仮定した。最終的に、統計的に有意なパスのみを残した (Figure 2)。モデルの適合度は、 $\chi^2(17) = 8.112 (p = 0.964)$, $GFI = .974$, $AGFI = .935$, $RMSEA = .000$ であり、データとモデルとの適合は良好であると言える。

分析の結果、登校回避行動に対しては、登校回避感情のみが有意な正の関連を有し ($\beta = .36, p < .001$)、他の変数からのパスは有意ではなかった。また、登校回避感情に対しては、学業に関するストレスが直接有意な正の関連を有した ($\beta = .39, p < .001$)。学内友人サポートは、大学生生活満足度と有意な正の関連を有し ($\beta = .38, p < .001$)、身体に関するストレスは、大学生生活満足度と有意な負の関連を示した ($\beta = -.37, p < .001$)。大学生生活満足度は、登校回避感情と有意な負の関連を有した ($\beta = -.35, p < .001$)。

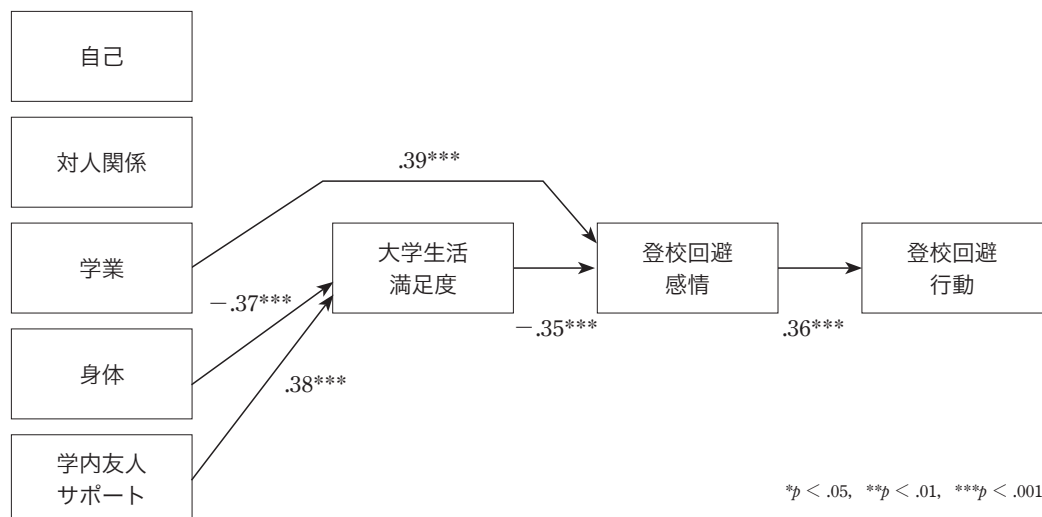


Figure 2. 入学期後半における不登校傾向と心理社会的要因との関連

注) 図が煩雑になるのを避けるため、誤差変数及び各ストレス要因間に仮定した共分散のパスは省略した。

考察

研究2では、入学期後半の不登校傾向と大学生活でのストレス要因、学内友人サポート、大学生生活満足度、個人属性との関連について検討した。

分析の結果、個人属性に関しては、いずれの属性の違いにおいても統計的な有意差は見られなかった。入学期後半においては、居住形態の違いが、不登校傾向と関連を持たなかった。このことに関しては、下宿生活をしながら大学に通う学生が、入学期後半になるとそのような生活スタイルにある程度順応してくることによると推察される。

次に、ストレス要因に関して、学業に関するストレス要因が直接登校回避感情と正の関連を有していた。学業に関するストレス要因には、学業上の負担の多さ（項目例 試験勉強の大変さ、レポートやゼミの準備が大変なことなど）と不適応感（項目例 成績が思わしくないこと、授業についていくのが大変なことなど）に関する項目が含まれている。堀井（2016）において、「授業のスピードについていけない」などの「学業脱落」は登校回避感情との正の関連を持つことが示されており、本研究結果は先行研究の結果を一部支持するものであったと考えられる。修学上の問題は、様々な形で「学生生活サイクル」の全ての段階において見られるが（鶴田，2001），不登校傾向との関連においては、入学期の後半からその影響が見られ始めることが示唆された。入学期前半は、一般的に教養系科目が多く、大学の授業形態やシステムに慣れていくことが学業上の課題となりやすい。一方、入学期後半になると、学生は徐々に大学の授業スタイルに慣れてくる反面、専門的な授業や実習等が開始されるた

め、授業内容を理解することの困難さや授業についていくことの難しさなどの問題が顕在化し始めると考えられる。また、前期の成績を受けて、大学の授業の難度の高さに直面させられたり、単位取得への不安が生じたりする場合もありうる。これらのことから、入学期後半においては、学業に関するストレスは、登校回避感情と正の関連を有したと考えられる。また、学業に関するストレスは大学生生活満足度とは関連を持たなかった点も特徴的である。このことは、大学生生活満足度には学業以外の要因（対人関係や課外活動の充実など）も関連していることによると推察される。それゆえ、大学生活に満足しており、一見適応が良さそうに見える学生でも、学業上の難しさを抱えている場合には、大学への忌避感情が喚起されやすく、不登校行動を起こす可能性があると考えられる。したがって、入学期後半において、教員は、学生の表面上の適応だけで判断するのではなく、学業上の難しさを感じていないかについて確認することが、不登校の一次予防的アプローチとして重要になる。

身体に関するストレスは、大学生生活満足度と負の関連を有し、間接的に登校回避感情さらには登校回避行動と正の関連を有していた。身体に関するストレスに含まれる項目は、体調面の不良（項目例 体の調子が良くないこと、大きなけがや病気など）に関するものである。このような、身体的不調を経験することは、欠席を余儀なくするなど大学生活を思うように過ごせない体験となり、大学生活の満足度と負の関連を有したと考えられる。堀井（2016）においても、「心身不調」は登校回避感情及び登校回避行動と直接負の関連を有しており、不登校傾向を高めるリスク要因であることが指摘されている。しかしながら、身体に関するストレスは、入学期の後半においてのみその影響が見られている点が特徴的である。学生にとって入学期後半は、前半に比べるとある程度大学にも慣れ、大学生生活上のリズムがつかめてきている時期だけに、体調不良やケガなどによりそのリズムを乱されることは大学生生活満足度の低下を招く一因となるのかもしれない。

学内友人サポートは、入学期前半同様、大学生生活満足感と正の関連を有し、間接的に登校回避感情と負の関連を有した。このことから、学内の友人サポートは入学期を通して、学生の学内友人サポートの不登校傾向の予防に関わる要因であることが示唆される。

総合考察

本研究は、入学期前半と後半それぞれにおいて、不登校傾向と大学入学後のストレス、学内友人サポート大学生生活満足度、個人属性との関連について検討することを目的とした。各時期の結果の比較から、入学期の学生の学内友人サポートの不登校予防において有用と考えられる取り組みや、一般教員が学生の学内友人サポートの不登校傾向を把握する上で普段から注意すべき点について以下にまとめた。

研究1, 2を通して、どのストレスも登校回避行動とは直接の関連を持たず、登校回

避感情を介しての間接的な関連であった。このことから、入学後のストレスは、登校に対する否定的感情を高める形で影響を及ぼし、そのような感情は登校回避行動を生起させる先行要因になると考えられる。したがって、入学期の不登校に対する一次的予防においては、学生の登校回避感情の程度に注目することが最も重要である。

また、学内友人サポートは、入学期前半、後半に共通して、大学生生活満足度を介し、登校回避感情と負の関連を有した。このことから、大学生生活の満足感の高さは、登校回避感情に対する抑制要因となりうることが示唆される。そして、大学生生活満足度を高めるには、学内の友人サポートを高めることが有用な手段の一つであると推察される。学内の友人サポートの向上には、ソーシャルスキル学習や学生同士の相互作用を促す場の提供など、入学期に学内の友人関係の充実化を支援する働きかけを行うことが重要と考えられる。具体的には、1年生対象のゼミや教養系の科目で、大学生の友人関係の特徴や円滑なコミュニケーションに有効なスキルを学ぶ機会を設けることなどである。また、学生同士の相互作用を促す場の提供に関しては、これまでの研究から、学生相談室で継続的なグループワークを実施し、学生の学内での居場所づくりを支援する活動事例が報告されている（的場，2011 など）。このような取り組みは、通常の授業においても実施可能な部分があり、学生同士が協力して課題解決を目指すアクティブラーニングの導入もその一つの機会になるだろう。ただし、その際には、グループワークが授業内のただの活動になってしまわないために、学生同士が協力し合える雰囲気づくりやグループワークをスムーズに導入するための工夫が教員側には重要になってくる。

研究1、2の比較から、入学期の前半と後半で、不登校傾向と関連を持つ要因が異なることが示された。入学期前半では、居住形態と自己に関するストレスの程度に注目することが重要である。特に、下宿生活を開始した学生は、一様に不登校傾向が高まるリスクを抱えていることを教員側は認識しておく必要があるだろう。また、学生が自分自身の在り方について悩みを抱いていないかという点に注意して関わっていくことが、不登校の予兆をつかむ上で重要なポイントとなると考えられる。

一方、入学期後半においては、学業に関するストレスと身体に関するストレスの程度に注目することが重要である。特に、学生の表面上の適応状態にとらわれずに、授業についていくことの困難さや学業上の負担を感じていないかという視点から、教員が常に注意を払うことが、不登校の兆候を捉える上で重要となる。また、繰り返して体調不良の訴えのある学生やケガなどでしばらく欠席期間のあった学生に対しても、満足感の低下や登校意欲の低下が起こっていないかという点を気にしながら接していく必要があるだろう。

最後に、本研究の課題としては、以下の二点が挙げられる。第一に、研究1と研究2では、調査を実施した大学が異なるため、大学や学生の性質の違いが結果に反映されていた可能性がある。特に、研究2では、心理学系の専門科目の受講生を調査対象としたため、全員が同一の学科所属であり、調査を実施した時期に量的負荷の大きい専門科目の実習を受講してい

た。このことが、入学期後半において、学業に関するストレスと登校回避感情が正の関連を示したことに何らかの影響を及ぼした可能性は完全には否定できない。今後は、複数の大学の学生を対象に調査を実施し、結果の一般化可能性を高めていく必要がある。第二は、大学生生活満足度を1項目でのみ測定しており、漠然と全体的な満足感を測定するに留まっていた点が挙げられる。今後は、大学生生活のどのような側面の満足感が不登校傾向と関連するかについて詳しく検討していく必要がある。

以上のような課題はあるが、本研究から大学入学期前半、後半それぞれにおける不登校傾向と関連を持つ心理社会的要因が明らかとなった。学生生活サイクル上では、2～3年生が該当する「中間期」において、無気力や意欲低下の問題が生じやすいとされる（鶴田，2001）。また、堀井（2013）の研究結果からも、2，3年生において登校回避感情が最も高い水準にあることが示されている。これらのことから、今後は、中間期における登校回避感情と関連する心理社会的要因についても明らかにし、入学期との特徴の違いについて検討していくことが必要であろう。

* 付記

研究1は、日本心理学会第78回大会で発表した内容にデータを追加して再分析し、加筆修正を加えたものである。研究2は、日本心理臨床学会第37回大会での発表を基に、データを再分析し、加筆修正を加えたものである。

引用文献

- 福岡欣治（1997）．友人関係におけるソーシャル・サポートの入手と提供—認知レベルと実行レベルの両面から見た互惠性とその男女差について— 対人行動学研究，15，1-12.
- 早坂浩志（2010）．第10章 学生に向けた活動2—授業以外の取り組み— 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会（編）学生相談ハンドブック（pp. 185-201）学苑社
- 堀井俊章（2013）．大学生不登校傾向尺度の開発 学生相談研究，33，246-258.
- 堀井俊章（2015）．大学生不登校傾向尺度の開発（続報） 横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ（教育科学），17，115-130.
- 堀井俊章（2016）．大学生の不登校傾向に影響を及ぼす心理的要因 横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ（教育科学），18，106-114.
- 笠原嘉（2006）．スチューデント・アパシー 笠原嘉（著）新・精神科医のノート（pp. 62-81）みすず書房
- 笠巻純一・宮西邦夫・笠原賀子・松本裕史・西田順一・渋谷崇行（2018）．学生の栄養摂取状況に関連する要因の解明—性別と居住形態に焦点を当てて— 日本衛生学雑誌，73，395-412.
- 吉良安之（2001）．2章 入学期の特徴 鶴田和美（編）学生のための心理相談—大学カウンセラーからのメッセージ—（pp. 12-23）培風館

- 的場みぎわ (2011). 人間関係を育む場としての継続的なグループワークの有効性 学生相談研究, 31, 207-217.
- 水田一郎・石谷真一・安住伸子 (2011). 大学における不登校・ひきこもりに対する支援の実態と今後の課題—学生相談機関対象の実態調査から— 学生相談研究, 32, 23-35.
- 永井暁行 (2016). 大学生の友人関係における援助要請およびソーシャルサポートと学校適応の関連 教育心理学研究, 64, 199-211.
- 日本学生支援機構 (2017). 大学生生活の継続的変動と学生支援—大学等における学生支援の取り組み状況に関する調査（平成 27 年度）より— 日本学生支援機構 Retrieved from https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afiedfile/2017/04/14/h27torikumi_houkoku.pdf (2018 年 10 月 18 日)
- 酒井渉・野口裕之 (2015). 大学生を対象とした精神的健康度調査の共通尺度化による比較検討 教育心理学研究, 63, 111-120.
- 坂本真士・及川恵・伊藤拓・西河正行 (2010). 大学生における精神的不適応予防に関する研究 風間書房
- 嶋信宏 (1999). 大学生用日常生活ストレス尺度の検討 中京大学社会学部紀要, 14, 69-83.
- 下坂剛 (2001). 青年期の各学校段階における無気力感の検討 教育心理学研究, 49, 305-313.
- 鶴田和美 (2001). 1 章 学生生活サイクルとは 鶴田和美 (編) 学生のための心理相談—大学カウンセラーからのメッセージ— (pp. 2-11) 培風館
- 鶴田和美 (2010). 第 2 章 2 学生生活サイクル 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会 (編) 学生相談ハンドブック (pp. 34-41) 学苑社
- 内田英二・木本理可・塚本未来・神林勲・武田秀勝 (2015). 大学生における居住形態の違いが睡眠習慣および食習慣に及ぼす影響 大正大学研究紀要, 100, 331-340.

(2018 年 10 月 22 日 受理)